

額田王の経歴と蒲生野贈答歌

寺川眞知夫

はじめに

『万葉集』巻一雑歌の部に配された大海人皇子と額田王の贈答歌、

天皇蒲生野に遊獵したまひし時に、額田王の作れる歌

あかね指す 紫野逝き 標野行き 野守は見ずや 君が袖

振る

(一一一〇)

皇太子答へたまふ御歌「明日香宮宇御めたまひし天皇、
諡して天武天皇と曰す」

紫の にほへる妹を 憎くあらば 人妻故に 吾恋ひめやも

(一一一一)

紀に曰はく、「天皇の七年丁卯の夏五月五日に、蒲生野に縦獵したまふ。時に大皇弟・諸王・内臣及び

群臣、皆悉く従ふ。」と。
は、多くの考察が加えられてきた歌である。

今更、憶測を重ねる必要もないとは思うが、額田王の経歴を
想定しながら、これら贈答歌二首を中心に考察したい。なお本
論の概要となる論は先に発表した（拙稿「額田王考」「ポトナ
ム」一〇〇〇号記念特集 二〇〇九年九月）ので補うが、重複
するところもある。

これら二首の研究史は、服部喜美子氏の「蒲生野の贈答歌」
〔『万葉集を学ぶ』第一集 昭和五十二年十二月〕および神野富
一氏の「蒲生野贈答歌」〔『万葉集の作家と作品』第一卷一九九
九年五月〕に詳しいので、全体に言及することはしない。

(一) 額田王をめぐる三角関係の說

この二首の理解にもかわるが、額田王をめぐる中大兄皇子と大海人皇子の三角関係がかつて広く認められていた。現在はこの認める説と否定する説とに大きく分かれる。前者は二首の贈答が行われた天智七年の時点ですでに額田王は天智天皇に大海人皇子との中を割かれて妻に迎えられていたとし、三者間に三角関係が想定されていた。後者は三者に三角関係があったとするのは想像でしかなく、不明であるとする説、もつと積極的に大海人皇子と額田王は夫婦のままであったとする説もある。これらは当然、二首の贈答の理解にも大きく関係してくる。

旧説の三角関係説の一つの根拠になったのが、蒲生野贈答歌とともに、齊明天皇七年の西征の時に中大兄皇子が詠んだ歌、卷第一、十三番歌であった。この歌は、

中大兄（近江宮に天の下知らしめしし天皇）の三山の歌、

香具山は 歎火を愛しと 耳梨と 相あらそひき 神代より
かくにあるらし 古昔も 然にあれこそ うつせみも
嬬を あらそふらしき

(一一三)

反歌

香具山と 耳梨山と あひし時 立ちて見に來し 印南国原

(一一四)

わたつみの 豊旗雲に 入日さし 今夜の月夜 ま清かに
こそ (一一五)

である。長歌最後の三句を額田王を巡る自らと弟大海人皇子の妻争いを踏まえた表現と理解したのである。しかし、この歌は西征の折、播磨における三山の妻争の伝説に触れて、それを詠んだだけにすぎないとする説もある。これについては神野志隆光氏の「中大兄の三山歌」(『万葉の歌人と作品』第一卷 一九九九年五月)に詳しい。神野志氏も具体的人事とかかわらせるべきではないとされる。しかし、この歌が詠まれたのは中大兄の心に三山の妻争い伝説と響き合うものがあつたからで、ただ印南野の伝説を聞いて詠んだ歌とはいえない。吉井巖氏はこの歌について「神話と人との関係が崩れはじめたところで歌い出された一人の人間の歎きの歌」(吉井巖「中大兄三山歌」『万葉集を学ぶ』第一集 昭和五十二年十二月)との理解を示された。この説は注目される。神話を「現在の秩序のよつてくるところを神々の時代の出来事にかかわらせて明らかにするもの」

(カール・ケレーニイ／カール・グスタフ・ユング『神話学入門』一九七五年五月)とみると、現在の人間社会における妻争いは、神代の、始まりの時に性格づけられ、如何ともしがたい人間の業としてみる認識があつたことがわかる。中大兄は現在ある人間社会のありようを客観的に叙すためではなく、自らの内を見つめつつ、神代の妻争いの伝説を歴史時代、さらには現代の自らに引き寄せて歌っているといえる。この伝説を詠んだのは心理的葛藤も含め、現実には生きる自らの心に、三山の妻争いに強うたれるところがあつたからとみられよう。

かつてなされたように中大兄皇子が、権力にものをいわせて相思相愛の弟大海人皇子と妻額田王の間を裂いて、額田王を妻に迎えたといった想像をする必要はない。しかし、ここに歌われるような男女関係にかかわる感情が全く認められないわけでもない。注意すべきは、一三番歌の詠まれた斉明天皇七年の西征である。西旅では、中大兄皇子の他、額田王も歌を残している。熟田津の歌である。当然二人はこの西征に加わっていた。太田皇女も一行の中にいて備前の邑久の港で大伯皇女出産している。当然、夫の大海人皇子も同道し、場合によっては同じ船に乗って、道後温泉を目指していた。狭い船団のなかに中大兄

大海人、額田王の三者が同行し、しかも後に触れるように額田王は既に自ら大海人皇子の元を去り、斉明天皇五年以後、中大兄が彼女に近づいていたとすると、また大海人が額田王に未練を残していたとすると、三者のあいだに微妙な感情の緊張が生じており、中大兄にこの歌を詠ませたと想定することは許されよう。つまり、三山歌は狭い船団の中の一人の女性をめぐる二人の男性の微妙な心理的葛藤、あるいは感情的ゆらぎを、印南野の伝説に重ねて掬いと、詠んだ歌である可能性が高いということである。

このように、中大兄が感じていた額田王をめぐる大海人との微妙な心理的緊張感を想定するならば、この歌を自らの人間関係とは無縁の人間一般の事象を詠んだとはいえない。具体的人間関係と切り離れた本歌の理解は一つの解釈ではありえても、歌を詠む行為からは何か間遠い説のように思われる。

ではこの中大兄皇子、大海人皇子、額田王の人間関係は、どのように考えるべきなのであろうか。額田王の経歴を中心に検討しておきたい。

(二) 額田王の歌と大海人皇子・

天智天皇の關係

天武紀の后妃記事に、

天皇、初め鏡王の女額田姫王を娶して、十市皇女を生しませり。
(天武紀二年)

とあるとおり、額田王は大海人皇子(天武天皇)の最初の妻として結婚し、その第一子十市皇女を設けている。これは天武天皇の子女の中で十市皇女が最年長とみられることにも対応する。結婚の時期を明示した記録があるわけではないが、神話に照らせば成人式と結婚は結びついているし、平安時代の元服のありように照らせば、ここに「初め」とあるのは、額田王が元服の時の添臥として(梶川信行『創られた万葉の歌人』額田王―二〇〇〇年六月)結婚したことを想定させる。元服の年齢は決まっているわけではなく、時期も不明ながら、通常十三、四歳で成人式を迎えたとみると、結婚もほぼこの年齢とみてよい。

改めていうまでもないが、額田王の年齢は通常、大海人皇子との間に設けた十市皇女が天智天皇の皇子大友皇子と結婚して

産んだ葛野王の『懷風藻』所収の伝にみえる年齢に基づいて推定される。ここでもこれを試みる。葛野王伝の最後には、

皇太后(持統太后)、(葛野王の)其の一言の国を定めしことを嘉みしたまふ。特闕して正四位を授け、式部卿に押したまふ。時に年三十七。
(『懷風藻』)

とある。「三十七歳」には大まかには二つの説がある。①皇太子を立てる会議で葛野王が議論の方向を定めた持統一〇(六九六)年、②没年、の二説である。『懷風藻』では他の伝も含め、最後に記す年齢においては没年の数え歳を記すとみられる。『続日本紀』の葛野王卒伝は慶雲二(七〇五)年十二月二十日条にみえる。この年に数え年三十七歳とみると、誕生は天智八年(六六九)となる。念のために葛野王の年齢を会議の行われた持統一〇年(六九六)とみて計算すると、斉明天皇六年(六六〇)生まれ、同じく『懷風藻』に記す大友皇子の薨時の年齢は二十五歳、壬申の乱の年(六七二)であるから、誕生は大化四年(六四八)になる。これによれば葛野王の生まれたとき、父は十二歳の少年になる。ありえぬことはないが、通説どおり、葛野王伝の三十七歳は没年とみるのがよい。

次の問題は十市皇女は何歳で葛野王を生んだか、額田王は何

歳で十市皇女を生んだかである。この年齢設定によつて額田王の年齢計算にも揺れをきたす。

坂本信幸氏は奈良時代の女性の出産年齢を調査し、藤原乙牟漏は十五歳で平城天皇を出産したと指摘しておられる（紫のほへる妹」萬葉七曜会編『論集上代文学』第二十七冊 二〇〇五年七月）。また服藤早苗氏も平安時代における女性が一五歳くらいから出産している例を挙げられる（生命を賭した出産」『平安朝の母と子』一九九一年一月）。しかし、初産の年齢が一般的には十八歳から二十歳とみ、斉明六（六六〇）年に葛野王を生んだ時の十市皇女の年齢も満十八歳から二十歳とみると、十市皇女の生まれは大化五年（六四九）から白雉二年（六五一）、また額田王が十市皇女を生んだ年齢も同様に満十八歳から二十歳とみると、額田王の生まれた年は舒明天皇の元年（六二九）から三年（六三二）になる。天武天皇の正確な年齢も不明である。額田王が舒明天皇の皇后である宝皇女（後の皇極・斉明天皇）の近侍の女官として出仕し、大海人皇子に見染められて結婚した（伊藤博「遊宴の花」『萬葉集の歌人と作品』上 第四章「御言持ち歌人」 昭和五〇年四月）と考えることも可能であるが、先に触れたように宝皇女に気に入られて

大海人皇子の成人の時に添臥の相手に選ばれ、十三・四歳で結婚したとみてよからう。舒明天皇の崩御が大海人皇子の元服と結婚にどのように影響したか問題ながら、それはその十三（六四二）年から皇極天皇の二年（六四三）の頃とみられる。額田王は、大化五年（六四九）から白雉二年（六五一）の頃に十市皇女を生んだと推定すると、天智七年（六六八）には通説の如く、満三十七歳から三十九歳になる。もちろん女性の出産年齢は母体の成熟度とかかわり、個人差もあるから、年齢推定は絶対のものでないが、目安にはなる。若くして結婚し、出産したとみれば、その年齢は低くなる。

次に問題としたいのは、額田王歌の作歌事情である。額田王の歌に天皇の歌とする異伝をもつ歌がある。これについては額田王が天皇の代作をしたのだとの理解が成立している（伊藤博「代作の問題」『萬葉集の歌人と作品』上 第四章「御言持ち歌人」 昭和五〇年四月）。この異伝は額田王が代作をする歌人であったからとすると、最初の代作の歌は巻一第七番、斉明天皇の比良行幸の際の宇治での思い出を詠んだ次の歌、

秋の野のみ草刈り葺き宿れりし（屋杼礼里之）宇治の京
の仮廬し思ほゆ

（一七）

になる。万葉集は「明日香川原宮御宇天皇代」すなわち皇極天皇の時代に位置づけ、「額田王歌未詳」と題する。しかし、皇極天皇の比良への行幸は紀に記されない。この歌の左注には「右、山上憶良大夫の類聚歌林を検ふるに曰はく、一書に戊申の年比良の宮に幸すときの大御歌といへり。」とする。「戊申年」は孝徳天皇の大化四（六四八）年にあたる。これによれば孝徳天皇もしくは皇極上皇の比良への行幸・御幸の時の歌になるが、左注は続いて「但」とし、紀の記す斉明天皇五年の行幸記事として、正月の紀温湯、三月の吉野宮とともに三月の近江之平浦への行幸をあげる。大化四年の行幸記録が紀にはないように、紀に記されない行幸もありえるから、確かなことは分らないが、大化四年の行幸が秋であったとすると、『万葉集』の位置づけと詠作の季節は異なる。歌の「宿れりし」の回想表現に対応させると、斉明天皇の歌にせよ、額田王の歌にせよ、斉明天皇五年三月に大化四年秋の御幸の時のことを回想して詠んだ歌とみうる（吉井巖「額田王覚書」「萬葉」第五十三号昭和三九年一〇月、橋本達雄「初期万葉と額田王」『万葉宮廷歌人の研究』昭和五〇年二月）。もとより、額田王の場合はいずれの御幸・行幸にも従駕したとみてのことである。

さて、先の想定では、額田王は大化四年には大海人皇子と夫婦関係にあつて、大化五年から白雉二年の間に十市皇女を生んでいる。しかし、後に触れるが斉明天皇三年には離婚したとすると、額田王は大海人皇子と同伴した旅を思い返して詠んだ歌といえる。「類聚歌林」が「大御歌」としていたことについては代作歌説に従うべきと考えるが、作者の異伝には歌の共有説もある。万葉集に歌の共有は見られるとしても、如何なる歌が共有されるかは問題で、天皇のばあい側近に歌を詠ませることがありえても、側近が天皇の歌を共有して自らの歌とすることは想定しえないし、天皇にしても臣下の即境の歌を如何に共有し得たか問うと、天皇の作とされる歌の君臣共有説には従い得ない。

ところで、その代作説であるが、代作者は如何なる立場・身分でするのであろうか。

伊藤氏は、熟田津の歌について、「この歌の作者は、事実額田王だったのだが、王が斉明天皇の御意に融合し、その立場にたつてうたったために、この異伝が生じたものと考ええる。」（前掲「代作の問題」とされた。この説では額田王の身分については一切考慮せずに、代作とみなしておられる。また代作は前

もつて天皇に歌を提供したのか、宴席などの現場に出て即席で天皇の代わりに歌を詠んだのか、如何なる身分や立場で詠んだのかにも言及されない。額田王が大海人皇子の妃の一人であつたとすると、天皇は子の妃を宴席などにおける代作者として自由に使いえたのか疑問である。これには検討の必要もあるうし、伊藤博士は、

額田王は、すでに皇極朝（六四二—四年）において、一三、四歳で女帝の側近となり、その縁から女帝の子大海人に見せめられ大化年代に十市皇女を設けた、一方、歌人としては、一八、九歳の大化四（六四八）年、皇極上皇の心境に立つての七番歌によつてその才を認められ、大海人の妻の一人でありつつも、斉明—天智とつづく斉明母子の王朝に、「祭祀の王」、「遊宴の花」として仕え活躍したというのが、前節「代作の問題」と本節「遊宴の花」との考察から帰納される王の「実像」である。

〔遊宴の花〕前掲『萬葉集の歌人と作品』上）と述べてこうしたことを問題にしておられない。額田王が宝皇女（舒明皇后・皇極・斉明天皇）の女官であつた場合ともあれ、問題は、「大海人の妻の一人でありつつも斉明—天智とつ

づく斉明母子の王朝に、『祭祀の王』、『遊宴の花』として仕え活躍した」とされる論の核心部分である。臣下の妻に内命婦を勤める者はいたが、皇子の妻が母である宝皇女の家の女官、あるいは斉明天皇の女官、内命婦の役割を担うことがありえたのであろうか。斉明天皇の場合は女帝であるからまだしも、男性天皇天智の時代に至つても、皇太子の妻でありながら、男性天皇の女官もしくは後宮職員としての役割を担うことが、歴史的事実として想定可能か甚だ疑わしい。後宮との関わりでいえば、これはかなり強引な想定というほかあるまい。

次に中大兄との関係、斉明朝以後の額田王の身分について、いささか考えてみよう。

斉明天皇五年の比良行幸の時、額田王は天皇の代作歌をおこなつた。大化四年の皇極上皇の御幸にも、五年の行幸にも、斉明七年の西征などの行幸と同じく皇子達も従駕していたであろうが、額田王が天皇の代作をしえたのは、この時までには大海人皇子の元を去り、再び斉明天皇の五位以上の女官、内命婦の立場にあつたからであると考えるべきであらう。つまり、額田王は、大海人皇子の妃としてではなく、天皇に仕える女官として代作したということなのである。この時十市皇女は三歳から五

歳であつたが、養育のことは『養老令』『後官職員令』の「親王及子乳母条」に「親王及子者。皆給乳母。親王三人。子二人。所養子年十三以上。雖乳母身死。不得更立替。」とあるのに準じて考えると、大海人皇子の子として乳母が与えられ、十市郡の豪族（十市原主（孝安紀）、十市部（安閑天皇元年閏十二月是月））の援助もあつたから問題は生じなかつたであろう。

斉明天皇の西征のことは三山歌に関連してすこしみたが、七年正月八日難波津を出航して、伊与の道後温泉（石湯）には一月十四日に着き、二ヶ月余りを経た三月二十五日に娜大津に着いている（斉明紀七年条）ので、石湯に滞在したとみてよい。ここでよく知られた、

熟田津に 船乗りせむと 月待てば 潮もかなひぬ 今は
こぎでな (一八)

の歌を額田王は詠んだのである。この歌にも「類聚歌林」に基づく天皇の御製であるとする記述が左注として付けられている。この歌も額田王が天皇に代わつて詠んだ代作とされる。歌の詠まれた情況については、百濟救援軍の出航を命じる歌とする説もあるが、救援軍が道後に寄港したのか不明であるし、二ヶ月も逗留することはありえないから、一行の出航の時の歌とみれ

ば、護衛船団を含む一行に命令する歌ということになるのであるが、この歌の末尾に据えられた願望の終助詞「な」の表現に本当に全軍に命令するような力強さがあると解釈できるのであるか。私見ではそれはいささか言い過ぎではないかと考える。卷一の一番の歌の、訓に問題がある部分ながら、「家聞かな、名告らさね」とある「な」と同じ願望の終助詞である。この「な」にこだわれば、一ヶ月も滞在すると三月半となり、海風からも寒さが消えて船遊びが可能になり、それが実現して心躍らせながら船出する歌と理解するほうが相応しく思われる。それはともあれ、すでに触れたように、ここでも額田王は斉明天皇の女官、内命婦として、天皇に代わつて代作したものと考えたい。

伊藤博氏はこのあたりの問題には配慮されず、無頓着に越えられて、「遊宴の花」といった言葉で、額田王が大海人皇子の妻でありながら、天皇の宴に侍つて歌を詠み、臣下の喝采を得ていたように説かれたが、皇子の妻を「遊宴の花」とみることできまい。

また、宮廷歌人と捉える立場からは、「これ（天智天皇が春山万花の艶と秋山千葉の彩を競ひ憐ればしめた宴で、春秋優劣

の歌（一六番歌）を詠んだ時）を境として、王はサロンの花形としての位置を獲得し、云々と説かれた（橋本達雄 前掲「初期万葉と額田王」）。古代日本の宮廷におけるサロンとは一体どのようなもので、どのように成立しえたかと想定できるのであろうか。後宮のサロンを想定する説も含めて、古代の宮廷であるいは、後宮におけるサロンとは何かの説明が、必ずしも具体的になされてはいない。サロンが如何なる場所で、如何に成立し得たか、とくに男女の混じり合う形で存在しえたのかの説明も必要である。日本には宦官はいないが、代わりに童が使われており、成人男子が後宮に出入りできたとは考えられないであろう。後宮職員に関する限り、男性は見えない。これは律令制下のことであるとしても、それでは律令制以前には男性も後宮に出入りできたといえるのであろうか。

『日本書紀』には少子部栖鞋が、大安殿で天皇が皇后と同衾中と知らずに入ったという話（上巻第一縁）がある。これは大安殿の名に引かれた設定で、これによって男性が後宮に入れたとはいえない。大安殿もまた後の大極殿に相当するからである。平安時代であれば、清涼殿への昇殿が許されるだけであった。宮廷サロンはどこに想定しうるのであろうか。

また、天皇や皇子の妃の一員でありつつ、宮廷歌人として男性の前で活躍しうることがあったのであろうか。これについても説明はない。仁徳紀四十年是歳条には、

新嘗の月に当たりて、宴会の日を以て、酒を内外の命婦等に賜ふ。

という記述がある。「内外の命婦等」は律令制の知識にもとづいての記述であると『日本古典文学大系日本書紀』の頭注（仁徳天皇四十年是歳条頭注二〇）は記すが、この宴会も八田皇女皇后の主宰の女性だけの会であったような書きぶりである。おそらく、この記述がなされた当時においても、皇后や妃が天皇の催す宴に出ること、臣下の前で歌を披露するようなことはありえなかつたことを暗示するといえまいか。齊明天皇（皇極上皇）として額田王が大海人皇子の妃の一人であれば、そのような身分の者に歌を作らせ、臣下の前で芸人のような振舞をさせることはなかつたであろう。額田王がこの時、歌を詠み得たのは誰の妃でもなく、天皇に仕える女官であったことを示すと考えるのが穏当なところであろう。

天智天皇の時代の歌とされる第十六番から第二〇番までの作についても同様で、額田王がまだ大海人皇子の妃であったとす

ればもちろん、天智天皇の妃であつたとしても、官僚たちの居並ぶ公的な場や宴席に出て歌を詠むことはなかつたであろう。伊藤博氏のいわれる「遊宴の花」であつたとすれば、それは額田王が公的には大海人皇子や天智天皇の妃ではなく、公的な場に出る女官であつたからといつてよい。額田王がこれらの歌を詠んだのは、実質はともかく、後宮に属する妻の一人という立場になく、斉明天皇あるいは天智天皇に仕える女官、すなわち内命婦（「選叙令」の「蔭皇親条」には「凡蔭皇親者。親王子従四位下。諸王子従五位下。其五世王者。従五位下。」とあり、額田王姫王は大海人皇子の妻であつたこともあるから、五位を認められていた可能性はある。）であつたことを示すといえる。

内命婦の実際は解らないところもあるが、五位以上の身分をもつ女官、あるいは五位以上の高官の妻をいうとされる。内命婦について、神龜三年には「制。内命婦身帯五位。」（『続日本紀』巻九 神龜三年二月庚申条）と説いている。神龜三年以前、天武朝から文武朝の記録としては、「親王以下。小錦以上大夫。及皇女姫王。内命婦等。給食封。」（天武天皇五年八月丁酉条）、「賜親王。諸臣。内親王。女王。内命婦等位。」（持統五年正月

癸酉朔条）、「益封親王已下四位已上及内親王。諸王嬪命婦等。」（『続日本紀』巻三 慶雲四年四月壬午条）等とみえる。これらによると、内親王、女王と命婦は並置されるので、王である額田王は内命婦から外れるともいえるが、王でありながら内命婦として天皇に近侍した姫王などであつたと考えられることもできる。王については「繼嗣令」「皇兄弟皇子条」に、「凡皇兄弟皇子。皆為親王。（女帝子亦同。）以外並為諸王。自親王五世。雖得王名。不在皇親之限。」と規定する。時代は下るが、「内命婦无位大市女王。神社女王並従四位下。正五位下播磨女王正五位上。従五位上新家女王正五位下。」（『続日本紀』巻十一天平六年正月己卯条）のような授位の例もみえる。

横道にそれたようでもあるが、額田王もこうした命婦として斉明天皇に仕えたと考えたい。先に、額田王は皇極天皇に仕えていて、大海人皇子の元服の添臥に選ばれて結婚し、大化五年から白雉二年ごろに十市皇女を設けたとみた。その立場を確かなものにしながら、額田王は如何なる理由で大海人皇子のもとを去つたのであろうか。もちろん想定でしかないが、この頃から大海人皇子は胸形君德善の女尼子娘、天智天皇皇女大田皇女、鷗野讀良皇女（斉明天皇三年結婚（『持統紀元年条』）を次々に

迎えている。こうして顧みられなくなったのに堪えられず、自ら去ったのではないか。身分の高い男性が複数の妻をもつことは、当時としては異とするにたりず、嫉妬することに問題があるとみなされた。しかし、女性にとつて容易に受け入れられることでもなかった。時代は下るが、平安時代の物語、『落窪物語』には主人公の夫少将の母は、息子が落窪の姫君を二条邸に迎えながら、他に女性を迎える準備をしていると聞き、

いであなにく。人あまたもたるは、歎負ふなり。身も苦しげなり。な物し給ひそ。そのすゑ給つらんにおほしつかば、さてやみ給ひね。今とぶらひ聞えん。
〔落窪物語〕

といつて、息子の迎えた女性の立場と気持を案じる場面がある。社会的に容認されたこととはいへ、最初に妻となつた女性にとつて、夫が他に次々と妻、しかも皇女を迎えることは何時の時代も心の負担になることであつたといえる（拙稿「石之日売の悲しみ」『古事記年報』第三二号 平成一年一月）。それゆゑに、額田王が大海人に対する反発、不信任を懐くことはありえた。斉明天皇に近侍する代作者として詠歌した斉明五年三月頃までに自ら大海人皇子の元を去つて離婚したと想定する所以である。皇子の母である皇極上皇（斉明天皇）は息子の嫁であり、

自分が添臥に選んだ事情もあつて、皇子の元を去つた額田王をふたたび女官、内命婦として迎え、近侍させたと考えたい。

もとより、古代の貴族階級の離婚は珍しいことではない。周知のごとく、縣犬養三千代は最初、栗隈王の子美努王に嫁して葛城王（諸兄）、佐為王を設けながら離婚し、後に藤原不比等と再婚して光明子を設けている。他方では元明天皇の内命婦として出仕しており、天皇は和銅元年（七〇八）十一月二十一日からの大嘗祭の後に行われた二十五日の御宴において、その奉仕は「忠誠之至」であるとして、「橘宿祢」の姓を下賜している（『続日本紀』卷十二 天平八年（七三六）十一月丙戌条、
『続日本紀』卷廿天平宝字元年（七五七）正月乙卯条）。離婚といへば、斉明天皇も、如何なる事情があつたか、斉明紀に、
天豊財重日足姫天皇は、初に橘豊日天皇の孫高向王に適して、漢皇子を生れませり。後に息長足日広額天皇に適して、
二の男・一の女を生れます。
（斉明紀）

とあるように高向王と別れ、舒明天皇と再婚している。したがつて、離婚・再婚は決して許されないことではなかつた。額田王は離婚後、内命婦として斉明天皇に近侍したとすると、その五年の平浦への行幸従駕、また斉明七年の西征のときに、天

皇の代作を行ったと想定されよう。斉明天皇が額田王を内命婦として近侍させ、重用したのは、自らの離婚経験によるところ、その歌を中心とする才能への評価もあつたのかもしれない。

大海人皇子はその時、なお未練をもっていたとしても、額田王はそのもとを去つたのである。そののち、中大兄皇子が近づき、三山歌を詠むような心境に至つたとも考えられよう。そうして天智天皇は斉明天皇の崩御後、やはり内命婦として近侍させたのではなからうか。それというのも、天智天皇の側にあつても、額田王は十六番歌や十七・八番歌を、天智天皇の宴や儀式など公の場に出て詠んでいるからである。斉明天皇の崩御後、天智天皇に仕えた額田王は表向きは外部に出うる女官、内命婦として近侍し、内向きには天智天皇と実質的な夫婦関係にあつたものと考ええる。

『令義解』は「後宮職員令」に「妃二員、右四品以上。」「夫人三員、右三位以上。」「嬪四員、右五位以上。」とす。ここに内命婦は位置づけられていないが、『古典文学大系日本書紀』天武紀の補注(二九一)は、『続日本紀』の天武天皇の後妃所生の皇子の記述順にふれて、「統紀で天武天皇の第〇皇子と称する場合は、生母である后妃のうち、天皇の妻としての資格を

有する内命婦以上の者とそれ以外の者との二つのグループに分け、云々」と述べて、統紀では内命婦も後宮にあつては天皇の妻の一人であつたとみているとする。しかし、女帝の内命婦には橘三千代のような夫持ちの女性もおり、その実質的判断には難しいところもある。夫持ちでない内命婦の場合には、今みたように天皇の側近の女官であるとともに、実質的に妻であつた者も含み、額田王はその一人であつたとみたい。

額田王が実質的に天智天皇と夫婦関係にあつたことは、『万葉集』巻第四(八)の歌、

額田王、近江の天皇を思ほして作りませる歌一首

君待つと 吾が恋ひをれば わが屋戸の 簾動かし 秋の

風吹く (四一四八八)

(八一六〇六)

と、次に配された鏡皇女(鎌足正妻)の歌、

鏡王女の作る歌一首

風をだに 恋ふるはともし 風をだに 来むとし待たば

何か嘆かむ (四一四八九)

(八一六〇七)

とによつて想定される。額田王の歌の題詞はともに天智天皇と

関係付け、「額田王、近江の天皇を思はして作りませる歌」な

る題詞を付している。題詞を尊重するかぎり、このとき額田王は天智天皇と実質的な夫婦関係にあったと推定することはできよう。一方の鏡王女の歌はこれに和しているのであるが、この歌の「風をだに來むとし待たば」の表現からすると、夫鎌足の没（天智八年十月辛酉）後の歌と解されよう。ただし、額田王の歌の表現は中国六朝の「閨怨詩」に学んだものとされる。早くは土井光知氏が、

清風帷簾を動かし、晨月幽房を照らす。佳人遐遠に処り、
蘭室に容光無し。

〔玉台新詠〕卷第二、張華、詩情其三・『文選』文選 卷第

二十九 張茂先 情詩二首五言

との関係を指摘され（土井光知『古代伝説と文学』一九六〇年七月）、小島憲之氏も、

夜相思ふ。風の窓を吹きて簾動く、これ歎しき所の來れる
か。

〔清商曲辭〕吳声歌 華山畿

との関係を指摘されている（小島憲之『上代文学と中国文学』昭和三九年三月）。中西進氏も、

簾動けば君來るかと思ふ。雷すれば車の度るに似たり。

〔玉台新詠〕卷六 費昶「有所思」

などをあげられる（額田王論『万葉集の比較文学的研究』・『中西進万葉論集』第一卷 一九九五年三月）。したがって、文学的な作であって、具体的な人物を待つ歌ではないとみなす説もある。しかし、題詞は先ほども確認したように、天智天皇を思つての作とする。小島氏や中西氏の指摘された詩の表現には特によく似たところがあり、額田王がこれらの漢詩を踏まえていたとしても、彼女が置かれた立場を反映しながらかかる表現を生かして詠んだとみて、何ら不都合はない。影響を受けた詩があることだけで、額田王の具体的人間関係における真情を籠めた歌であることを否定する根拠にはならない。

額田王は、天智朝には十六番歌や十七・八番歌のように天智天皇の側について詠んだとみられる歌を残している。大海人皇子より天智天皇に近い存在であったことは確かである。天武朝には額田王は天皇の側について公的な場で歌を詠むことも、動向が伝えられることも一切なかった。この後、額田王の歌がみえるのは持統朝に入つて弓削皇子が歌を贈つたの応えて詠んだ時であった。このこともまた注意されねばならない。

額田王には、天智天皇崩御にかかわつて詠んだ挽歌が二首み

える。一首は次の歌である。

天皇大殯の時の歌二首（内の一首は舍人吉年）

かからむと 懐ねて知りせば 大御船 泊てし泊に 標結

はましを「額田王」

（二一五二）

これは、琵琶湖の西岸に造営されていた大津京にふさわしい表現によつて歌っている。

天智天皇の崩御は十年十二月である。この後、壬申の乱の発端として大友皇子が天智天皇の墓の造営のために尾張国司小部連鉤鉤に武器を用意した人夫二万人を集めるように命じたことが天武即位前紀にみえている。天智天皇の陵墓は近江大津の宮からは逢坂山を越えた山科にある。ここに陵を作ることを口実に兵士を集めようとしたと天武即位前紀は書くのである。壬申の乱まで、すなわち翌年六月までに、この陵墓が完成されていたのかどうかはともかく、後にあげる一五五番歌によると山科の御陵で埋葬が行われたことは確かなようである。その内容からして壬申の乱の後のことではあるまい。

大津宮の内裏は近江神宮の西南、錦織のあたりとみてほぼ間違いないようであるから、遺体は殯宮の後、逢坂峠を越えて運ばれたものとみられる。大御船は天皇のお召しの船をいう表現

であるが、御船代のイメー、魂の乗り物としての船のイメージなども重ねながら、船が出ていかないように留めておいたのにと、標を結わなかったことを悔いる思いを表現し、天皇の崩御を嘆く。心を後に残しながら亡くなった天皇の思いを和める表現を試みているといえる。これは公的な場で人々の心を代表しつづ歌っているようである。

このとき大友皇子とこれを支える近江の宮廷の人々の心にあつたのは、吉野にある大海人皇子が如何に動くか、その動向への不安であろう。額田王がどのように思っていたかは分からないが、近江大津・山科にあつて天智天皇の喪に服していたとみてよい。その心に分け入れれば、大海人皇子との間に設けた実の娘、十市皇女が大友皇子の妻になっており、その運命とのかかわりで、大海人皇子の動きに不安をもつたことであろう。額田王の思いは、現状での安定を願う近江方の人々の思いと共通し、娘を思えば、その願いはさらに深かつたであろう。十市皇女、葛野王たちの安全、あるいは大友皇子の体制の安定を願えば、天智天皇の長命こそが願わしかつたのである。この歌には額田王の天皇の崩御を悼む思いとともに、自らの娘の運命ともかかわらせて心痛める、母あるいは祖母の不安な思いを込めて

いよう。「かからむと」は天皇の崩御によつて、大海人皇子をめぐる新たな動きが始まつたことを暗示するのであろうか。ここには自らの力では予測も、押し止めることのできなかつた、時代の転換をも含む、取り返しのできない事態の出現への不安も秘めてゐる。

とはいえ、この挽歌は後宮の婦人達の挽歌とは異なり、女官舎人吉年（四四九二・四九三参照）の歌とともに収められている。ここでも表面的、あるいは第一義的には天皇の側近としての、公的な歌として詠まれ、位置づけられている。額田王は後宮にある天皇の妻の一人として私的な挽歌を詠んだのではなく、公に開かれた部分にいる女官として歌を詠んでいるのである。このあたりに、天智天皇と額田王の位置関係があらためて確認できる。そのことは、次の山科の御陵から退散するときの歌によつても窺える。

ここにみる歌はその題詞のとおり、埋葬が終わつて、山科の御陵から引き上げるときの歌である。先にみたように、御陵を造ることを口実にして尾張国から二万人の兵士を集めようとしたが、大海人皇子との関係が緊迫した時期でもあり、大化改新の薄葬礼からしても、天智天皇の葬儀は殯宮にそれほど時間を

かけてはいまい。その歌は、

山科の御陵より退り散けし時に額田王の作れる歌一首
八隅知し わご大王の 恐きや 御陵仕ふる 山科の 鏡
の山に 夜はも 夜のことごと 昼はも 日のことごと
哭のみを 泣つつありてや 百礮城の 大宮人は 去き別
れなむ
(二一五五)

である。大宮人たちが、天皇のために哀悼の意を表する行為として、号泣しているが、その儀礼の時がすぎれば、やがては立ち去つてしまふ、そういう葬儀によくある情景を、比較的醒めた目でとらえて歌っているようにみえる。このようにとらえると、葬儀についての額田王自身の感想を表現した歌であるようにみえる。しかし、大宮人とともにある額田王のそれも含めての行為ととらえると、まさにそれこそ、亡くなった者と生ある者との別れであり、いかに激しく死を嘆こうともはや死者の蘇りはなく、残された者はもはやそこに仕え続けることはもとよりまますならず、心を残しながら御陵から日常の内に還つていかざるを得ないのだ、という確認と嘆きを歌つたと理解することができる。幽明境を異にした者の避けがたいありようをあらためて認識し、人生の定理として歌うわけである。

したがって、額田王は大宮人と異なる立場に身をおいて、大宮人たちのありようと、自分の思いとのずれを見つつ歌っているのではなく、如何に嘆き、別れがたく思つても葬られた者にいつまでも仕え得ない宮人たちの代表として歌っていると理解すべきなのであろう。

すなわち、この歌は個人的な述懐ではなく、題詞のとおり、埋葬を終えて御陵から引き上げるときの儀礼の場で、大宮人や宮人のなかに身を置きながら歌つたとみると、額田王はやはり、その一部としての特別の存在たる後宮の一員、いわば親族としてではなく、埋葬の儀を取りおこなつた宮人の一人として、公的な立場で歌を歌つてことになる。すくなくとも表面に見えるこのような立場からすると、いずれも後宮の一員としてよりは、女官としての公的な場での歌といえる。天智天皇と額田王の距離は後宮の人々よりも遠いのである。このことは、

天皇崩後の時、倭太后の御作りませる歌一首

人はよし 念ひやむとも 玉纒 影にみえつつ 忘れえぬ
かも (二一四九)

と歌う、倭姫皇后の天皇に密着した思いの表現に比べると隔たりの大きさはよくわかる。

額田王も個人的な天皇への思いを表現することが許されておれば、こうした纏綿とした思いを歌つたと思われる。そうした力量や歌が額田王になかったわけではない。そうした歌がなくとも、額田王と天智天皇の間がよそよそしいものであったとか、離れていたとかいうわけでもない。この時、額田王に期待されていたのは、個人的な抒情の歌ではなく、大宮人・宮人などの宮人の思いを代弁する歌であつた。個人的な歌があつても、万葉集には収められなかつたのかも知れない。ここに、近江朝あるいは斉明朝における女流歌人額田王の立場と期待されていたところが見えよう。もし、額田王が「遊宴の花」であつたとする

と、それはこうした身分・立場によつてありえることであつた。こうしてみてみると、額田王は大海人皇子と別れ、斉明天皇さらには天智天皇に近侍する内命婦となり、天智天皇との関係についていえば、表向きは公的な場にもでる女官でありながら、実質的な妻であつたとみられる。それゆゑ、若い時期には大海人皇子との関係でいえば、微妙な感情的なものが全くなかつたとはいえないと考へる。

額田王の立場をこのようにみて、次に蒲生野における贈答歌について検討してみたい。

(三) 二〇・二一番を宴席の歌とする論

蒲生野贈答歌については、『万葉百歌』（池田弥三郎・山本健吉著、昭和三八年八月、中公新書）の説が一時代を画し、これら相聞の理解に一つの大きな転換点をなしたことは確かである。宴説は折口信夫説（『額田王』「折口信夫全集」第九卷、昭和四一年七月）を發展させた説であつたとしてもである。池田・山本両氏は、①二首は卷二の相聞の部ではなく、卷一の雑歌の部に収められていること、②題詞に五月五日の蒲生野での菓狩の折の歌とあることの二点に注目し、菓狩の夜に行われた宴での贈答の歌とみて、

これは深刻なやりとりではない。おそらく宴会の乱酔に、天武が無骨な舞を舞つた。その袖のふりかたを恋愛の意思表示とみたてて、才女額田王がからかいかけた。どう少なく見積もつても、このときすでに四十歳にならうとしている額田王に対して、天武もさるもの、「にはへる妹」などとしつべ返しをしたのである。（池田弥三郎）

「袖振る」は古代の魂ふりの方法であり、また愛情表出の方法である。（中略）「野守は見ずや」、つまり人が見ていま

すよとたしなめてはいるが、見られて悪いわけではなく、宴席の座興であり、あけひろげた気持ちでの戯れなのである。四十女の場慣れした気持ち、そんな冗談を言わせるのである。大海人の和え歌は、相手の言つた「紫」という言葉そのまま取つて、「紫の匂へる妹」と言つた。当意即妙である。四十女の残りの色香を讚めるポーズをみせた。真情を吐露しているように見えて、座興であり、仮構なのである。（中略）宴席の自由な雰囲気、ふさわしく、おおびらな愛情の言葉を投げつけ合いながら、戯れ、演技している。それがこの座の喝采を博したのだ。（山本健吉）

とされた。以来、この説に対して旧説の立場にそつてこれを受け入れようとする説もない（前掲「蒲生野の贈答歌」）が、大筋では池田・山本氏の指摘にもとづき、その言い過ぎと思われる部分を修正したり、この方向を展開したりしつつこの歌の理解を深めようとしている。

細部はともあれ、二首が公的な歌を収めた卷第一、雑歌に収録された理由としての、宴会の歌説は大方に認められて定説化し、贈答歌が秘めたる恋の歌であるとする理解は否定されることになつた。問題になるのは「紫の匂へる妹を」が額田王に対

するしつべ返ししの表現たりえるかである。伊藤博氏は「歌の解釈は本稿と一様ではないけれども」としながらも、

掛合唱和の歌には相手側のことばをとつてしつべがえしをする伝統があり、その脈は、万葉集においても、すでに初期万葉以来、問答歌や贈答歌に作歌のエチケツトとされて尾を引いているが、当面の歌も、大海人の「紫の匂へる妹」は額田の「赤根さす紫野行き」に食いつきそれを取つて返したもので、このからみあいも、二首を宴席での唱和とみるのに不都合はない。

掛合のしつべ返しといえば、(中略)天智七年(六六八)年のこの年、額田王の年齢は三八、九歳程度だったと見る中島説が最も穏当だと思うが、とすれば初老四〇歳に近い女を「紫の匂へる妹」とうたっているから額田王のこの時の年齢は三〇歳程度で押さえないというのは、後人のしがない願望ではない。事柄は「人妻故に」でも同様で、人妻(天智妻)でもないのに、本日の素材を道具立てにして人妻(天智妻)であるかのように唱えた歌に対し、本当の夫である大海人が、「人妻故に我れ恋ひめやも」とすまして応じたところに、逆に満座の笑いをそそるしつべ返しがあったわけである。

(前掲「遊宴の花」)
と述べられた。この理解は、ここにも触れておられるように、額田王を天智天皇に仕える女性とはみず、皇太子大海人は「王の本当の夫であった」(『萬葉集釋注』第一卷 一九九五年一月)とする考え、大海人皇子と額田王はこの時も本当の夫婦であったとの見解に立つ。

二一番歌の解釈については「人妻故に」の表現に、「人妻であるあなたゆえに、の意。人妻に手を出すことは固く禁じられていた。『ゆゑ』は原因・理由を表す。『に』を添える時、くなのにという逆説の意を示すことが多い。」と注した上で、
紫草のように色あでやかな妹よ、そなたが、好きでなかったなら、人妻と知りながら、私はどうしてそなたに心惹かれたりしようか。(『萬葉集釋注』第一卷 一九九五年一月)
と口語訳されている。

伊藤氏は、額田王は天智七年においても大海人の妻であったとの見解を示されたが、一般的傾向としても、かつて広く受け入れられていた額田王・大海人皇子・天智天皇の間には三角関係があったとする説は否定される傾向にある。これとは別に、人妻は禁忌の恋の対象となり、人妻だから関心が向くとする説

〔大岡信「日本の古典詩歌」 万葉集を読む〕二〇〇〇年一月
（一九八五年四月初出）、多田一臣「額田王論——万葉論集——
二〇〇一年五月）もある。そうした内容を歌う歌が万葉集にあることは確かであるが、この場に天智天皇も臨んでいたとすると、天皇主催の宴で天皇の妻にかかわらせてそうしたことを歌い得たかどうか疑問なしとしない。こうした表現が不敬となるのであれば、万葉集にその類の歌があるということ、この歌の詠まれた情況との関係についての見解も示される必要があると思われる。したがって、蒲生野の贈答歌を議論する場合、如何なる立場に立つて立論しているのかを明確にしておかないと議論は混乱することになる。

私見では、前節に触れたように、額田王はその活動からして大海人皇子と結婚して十市皇女を生んだ後、斉明朝の五年までに皇子の元を去り、天智七年には表向きは天皇に近侍する女官内命婦として、実質的には天智天皇の妻の立場にあったとみる。内命婦としての額田王がこの歌を詠むにあたって、天智天皇の示唆が有ったかどうかはともかく、池田氏の推測されたように、大海人皇子の舞の所作を額田王に合図するものと見立てて歌いかけた歌であったとみる。この歌いかけは歌垣における闘

歌のように、挑む歌を贈ることに他ならなかった。つまり、この歌は大海人皇子が如何なる歌を返すか試そうとする歌であった。大海人皇子はこれに応じ、巧みに切り抜けたといえる。

ここで四十女といい、残り香といい、そうした女性の年齢的、肉体的弱点を皇太子という最高位に近い地位になり、高い教養を要求される男性が、しつべ返しとか、戯れとかいっても、臣下の前であげつらったかどうか疑問に思われる。確かに、巻第十六には相手の肉体的弱点を捉えて攻撃した悪口歌（三八四〇〜四六、三八五一・五二）がみえる。しかし、官僚仲間の宴席とは違い、天皇の宴の満座の中で天皇の妻を笑いにし、心を傷つけるような歌を返すことは許されまい。歌の闘いとはいえ、宴席で人を傷つけるような表現をすれば、座をしらげさせ、良い歌を返したことはない。場の雰囲気壊さず、しかも皆が感心するような歌を詠み返すことがこの宴においては求められ、それをなすことが巧みな返歌とみなされたとすべきであろう。こうした観点に立てば、池田・山本説のように「しつべ返し」などとして、相手の年齢、容姿を手がかりに女性を笑いものにする歌と理解することはできない。

坂本信幸氏は、こうした疑問もあつてか、佐々木信綱の「評

「積萬葉集」(昭和二三年一月)や松田好夫の「紫の恋」(『萬葉集研究 新見と実証』昭和四八年一月)の説をふまえ、二一番歌の「むらさきにはへる妹」の表記、すなわち「むらさき」が「紫草」と書かれていることに着目し、これは紫色を表す表記ではなく、紫草そのものを表す表記であり、葉狩の行われる標野一面に咲きにおう紫草の白く小さな花の、それでいて清楚なイメージを表現しているのであり、紫の花のような額田王と褒める表現であると説かれた。この説は聞くべきで、白く小さな花のイメージは上品な四十祭近い女性のイメージに合うかもしれない。しかし、紫草とあつても、紫色を意味しないとはいえない。もちろん坂本氏は、「紫草のにはへる」のような

「の十にほふ」の形の表現をとる場合、上に来るのは花などである例をあげて脇を固めて論じておられる。ただ、紫草は花を賞るものではなく、根を乾燥して用いるものである。根は放置し湿気を帯びると赤紫色を発色する。

笠女郎、大伴宿禰家持に贈る歌三首

託馬野に 生ふる紫草 衣に染め いまだ着ずして 色に出でにけり

(三二九九五)

の「紫草」を衣に染めるといふのは、この根で「紫」に染色す

ることをいっている。したがって「紫草」なる表現が紫色とまったく関係ないとはいえないのである。

『伊勢物語』四十一段「武蔵野の心なるべし」という「心」は、『古今和歌集』の、

紫のひととゆゑにむさし野の草はみながらあはれとぞみる (古今和歌集 八六七)

という歌の心を意味する。歌意は武蔵野の紫草一本、つまり、武蔵野に住む一人の女性の存在によってその一族皆が皆慕わしく思われるとの意味である。紫草に絞ってというと、田舎の美女に譬えられる草になりかねないが、花ではなく紫を発する根が重視されていよう。二〇番歌でも花ではなく、葉狩の際に堀取られる薬草・染料としての紫草が意識されていようし、紫草の花が匂うという表現が宮廷の美女を褒める表現として十分なものであろうか、見解が分かれなくはない。宮廷の女性のあてやかさを讃える歌の詠まれた状況からすると、掘り出した根から出るあてやかな赤紫色そのものをいうと解しても問題はないうように思われる。

二一番歌の「紫」の表現は二〇番歌の表現を引き取りつつ、今行われている薬狩にかかわらせて、額田王の美しさを讃える

ための表現として紫草を選んでいる。問題はやはり四十歳の女性を褒めるのに紫のようにあでやかというのが適切か不適切かに帰しそうに思われる。池田氏は四十歳の女性を「紫の匂へる妹」というのは皮肉だと解された。

このようにいうとき、この宴の性格についてもみておく必要がある。葉狩の後のにぎやかな無礼講のような宴とみられているが、他方で神野富一氏は、井村哲夫氏の「歌舞踏歌」(赤ら小舟 万葉集作歌作品論)昭和六一年一〇月)の論を紹介しつつ、この宴では田儻がおこなわれ、芸能に関心があつて、後に田儻を整備したと伝えられる大海人皇子が奉仕したとみ、この歌は田儻のなされた宴の折の歌であつたとされる。田儻を舞うための歌なのか、田舞を舞う大海人皇子の所作を捉えた歌なのか、理解が行き届かないが、儀礼的な場であれば、額田王とて冷やかす歌を歌い得たのか問題になる。田儻の初見は天智十年に、

五月の丁酉の朔辛丑(五日)に、天皇、西の小殿に御す。
皇太子・群臣、宴に侍り。是に、田儻再び奏る。

(天智紀天智天皇十年)
とみえ、五月五日なので、この場合もそうした舞がなされた可

能性はある。田儻については、

壬戌に天皇、大安殿に御して、群臣に宴したまふ。酒酣にして、五節の田舞を奏す。訖りて更に少年・童女をして踏歌せしむ。
(『続日本紀』卷十四天平十四年正月条)

とあり、さらに、皇太子阿倍内親王が舞つた五節儻(五節田儻)については、

飛鳥淨見御原宮に大八洲知らしめしし聖の天皇命天下を治め賜ひ平げ賜ひて思ほし坐さく、上下を斉へ和げて動無く静かに有らしめむには礼と楽と二つ並べてし平けく長く有る可しと随神も思ほし坐して此の舞を始め賜ひ造り賜ひきと聞し食して云々。(『続日本紀』天平十五年五月五日条橘諸兄上奏)と諸兄が太上天皇に奏しており、君臣和楽の礼楽として天武天皇が壬申の乱以後に整備したと解されている。しかし、芸能の整備に熱心であつたとされる天武天皇の時代には田儻のことが記されないのは、初見の例のみを記すからであろう。この五節儻は皇太子阿倍内親王が舞つたからでもあるまいが、少女の舞として整備されていく。「令集解」の雅楽寮条には弘仁十(八一九)年十二月二十一日の官符を引き、「雅楽諸師数を定める事」には「舞師四人」として「倭舞師一人。五節舞師一人。田

舞師一人。筑紫諸県舞師一人。」とし、五節舞と田舞を分けてゐる。五節舞が少女舞になっていくのにこだわれば、五節田舞はもともと早乙女をイメージした少女の舞として始めたとも考えられる。とすれば、大海人皇子が舞つた舞は田舞に限定する必要はなからう。また田舞が上下和紫の礼紫としての儀礼的な舞とすれば額田王が大海人皇子の舞を冷やかすような歌を歌いかけることができたか問題にならう。

天平十四年には酒酣になつて五節田舞が舞われているが、「酒酣」はもとより無礼講のように理解すべきではあるまい。良く知られるように、『藤氏家伝』は大海人皇子について、

七年正月、即天皇位す。是に天命開別天皇と為りて、朝廷に事無く、遊覽するに是好し。人に菜色無く、家に余蓄有り。民、咸く太平の代と稱ふ。帝群臣を召して、濱樓に置酒したまふ。酒酣になりて欲極る。是に、大皇帝、長槍を以て、敷板を刺貫きたまふ。帝驚きて大きに怒り、以て執害せむとしままふ。大臣固く諫む。帝即ち止りたまふ。(『大織冠伝』)

と、大津皇子は、

群公倒に載せて帰る、彭澤の宴誰か論らはむ。

〔『懐風藻』「春苑言に宴す。一首。」〕

と詠む。宴には度を過ぎた酩酊もなかつたとはいえないが、天皇臨席の宴は秩序が保たれ、度を過ぎた無礼講のごとき情況が出来したとは考ええまい。

ここで、今一度「紫のようにあでやかな四十歳の女性の美」の問題に戻ってみると、四十歳前の額田王はもはやあでやかな美しさを失つていたといえるであろうか。坂本氏は古代の女性は一、五倍した年齢が相当するとされる。しかし、考えてみたいのは当時の食生活である。

当時はまだ仏教が浸透していず、殺生禁断の詔もまだ出されていない。天武紀に、

庚寅に、諸国に詔して曰はく、「今より以後、諸の漁獵者を制めて、檻穽を造り、機槍の等き類を施くこと莫。(中略) また牛・馬・犬・猿・鶏の食を食ふこと莫。以外は禁の例に在らず。若し犯すこと有らば罪せむ」とのたまふ。

(天武天皇四年四月)

とあるのが、早い例であろうか。この時も、野生の鹿・猪などの狩猟は取り方に制限はあるが、禁止されていない。現にこの歌が詠まれたのは葉狩であつた。鹿の角袋を取るための猟であつたけれども、皮の利用はもちろん、肉も臭気があつたとし

ても乾肉や塩漬けなどにして食用に供されたとみられよう。大量ではなかったとしても、貴族の女性たちは肉食をし、蛋白も脂肪も豊富に摂って、現代に近い食生活をしていたとみうる。

当然その肉体は、現代の同世代の女性のイメージに近かったのではあるまいか。もちろん、精神的な問題もあつたかと思われ
るが、額田王は四十歳近くなつていたとしても、また時代の風として実際には孫がいたとしても、肉体的若さを保つていたのではないかと思われる。その意味で「紫の匂へる妹」が皮肉になつたかどうか疑問である。おそらく額田王は正真正銘あてやかで美しい女性で、これを称えた表現とみるべきであろう。

いずれにしても、この歌は宴の席における歌であり、天智天皇の内命婦、実質的にはその妻の一人となつていた額田王の美しさを讃える歌であつたとみるべきであろう。

褒めるのはなぜか。今の額田王の立場を考慮するとき、褒めざるをえなかつたからである。この歌は本当の恋心を歌つてゐるわけではなく、宴席における恋人同士の相聞に擬して歌われた歌であつたと認めてよいが、個人的な冷やかしや戯の歌ではなく、宴席の雰囲気十分に配慮し、その場の雰囲気を高める歌であつたと見ねばなるまい。とすれば、ここで皮肉が歌われる

はずがなく、額田王を褒め、その女性を実質的な妻としている宴の主催者天智天皇を褒めなければならなかつたと考えるべきであろう。

額田王の歌は池田氏の説のとおり、皇太子大海人の舞にかかわつて詠まれたとみると、二首の意味は、大海人皇子の舞を目の前にしつつ、昼間の紫野の情景をふまえ、額田王が、

アカネ色を帯びた紫を取る紫草の野を行き、その標野を行
きして袖をお振りになるのを、野守が見ているではありま
せんか

と舞を自分に対する合図のように見立てて、大海人皇子が如何なる歌を返すか試すかのように歌い掛けたのに対し、大海人皇子は相手の歌の紫をとつて褒め、合わせて一度は夫婦となりながら自分は引き留め得なかつた美しい女性を側に置く天智天皇をも褒める歌、

紫草のいだす赤紫のように照り映えている妹をにくいと思
うならば、人妻である人のせいで恋するということがあり
ましようか 私はこころ惹かれてゐるのです。

と応えたのである。後者の「人妻故に」の「故に」は吉野政治氏の説かれたように「人妻ゆゑに——逆的に訳されるユエに

ついで」〔万葉〕第一三七号 一九九〇・一一 『古代の基礎的認識語と歌語の研究』二〇〇五年 和泉書院所収)、逆説の意はなく、原因・理由を表す「故に」とみてよく、ここでは「人妻のせいで」と訳しておきたい。

宴の席において歌の掛合はあり、それは歌の戦いになることもあった。しかし、そうしたばあい、相手をやりこめることだけが、相手を負かすことではない。当意即妙に切り返すこと、平然と受け流すこともまた、相手に勝つことでもあった。額田王は相手の反応を見るような歌をも歌い掛けえる頭の回転の速い才媛であり、この場合はそうした歌を大海人皇子に振ったのである。答え方によっては、単なる戯れの相聞では片付かない、誤解を生んだり、反発や怒りを招きかねなかつた。しかしながら、大海人皇子は額田王の心をくすぐりながら褒めて受け流し、その試しを見事に切り抜けて、皆を感心させるできばえをみせているといえよう。その意味で、歌の戦いにおいては勝つていると評価できる。

改めていえば、池田・山本両氏の指摘のように、宴席で額田王が、恋人を装って大海人皇子に歌いかけて反応を見たのに対し、大海人皇子も額田王の挑戦に巧みに応じた歌であり、相聞

のなかに置けば、真実の恋愛感情を直接交わした実質的な相聞と解釈されない贈答となつた。それ故、表面的には間違いなく相聞でありながら、万葉集では配慮し誤解を生まないように雑歌の部に収めたということなのであろう。いずれにしても両歌は、宴の場に並んだ人々が納得する才気のある歌であつたといえよう。

おわりに

以上述べたところを簡潔に纏めると、次のようになる。

額田王は添臥として元服した大海人皇子の最初の妻となり、十市皇女を生んだが、皇子が次々と妻を迎える中で斉明天皇五年以前に大海人のもとを去り、その後七年以前に中大兄皇子が額田王に近づき、大海人皇子もお未練を残していたので、三角関係のような感情のもつれが生じて、中大兄皇子は三山歌にそうしたものを歌い込めたと考えられる。しかし、斉明天皇崩御の後、中大兄皇子が実質的に政權を握つていたとすると、もはやそうした感情を表にだすことは許されなくなつたであろう。というより、もはや感情的なものも解消されていたであろう。こうした事情を考えると、額田王と大海人皇子の歌はどのよ

うに理解すべきかはいうまでもない。

別れて十年以上、今は天智天皇に近侍する女官、しかし実質的にはその妻として寡の席に出てきてはべり、昔の夫をからかうような、如何に答えるか試すような歌を詠んだのである。そこには天智天皇の弟をからかう意図も重ねられていたかもしれない。宴席で、突然、今はもう自分とは縁のなくなつた額田王が、昔の關係を思い起こさせるような、しかも媚びるような戯れの歌を自分に向けて詠む、このとき、大海人皇子は如何なる歌をよめばよいのか。天皇の前では如何に答歌を歌うか、微妙な問題を含んでもいるので、周囲は緊張して見守つたであろうが、大海人皇子は額田王の美しさをいうことで巧みに切り抜けたのである。昔、妻であつたとはいへ、今は兄の天皇の實質的な妻となつている女性に向かつて、正直に今もお前が好きだなどとは歌えまい。微妙な思ひが蘇つたとしても天皇の前でも差し支えない、というより天皇の心をくすぐるような歌、優越感を感じさせるような歌を詠む必要があつたのである。

大海人皇子が詠んだのは、額田王は今もなお魅力ある存在で

あり、憎くは思わないが、今は手の届かない人妻として自分のところを乱し続けると歌い、その魅力ある女性を妻としている兄天皇をも立て、そうしてその場を盛り上げ、満足させる歌でもあつたといえる。人妻は禁忌の恋の対象となるとする説もあつたが、もし、額田王が天智天皇の側近であり、實質的な妻であつたとすると、その女性を悪く言うことはそのまま天皇をも悪く言うことになるのと同じく、人妻であるから心曳かれると直截に歌えば、きわどい表現になつて額田王を今は自らの側に置いている天皇の氣分を害する歌、寡の場の雰囲気壊す歌になりかねないとすると、果たしてそうした歌が歌われたか疑問である。ここでは、大海人皇子は巧みに額田王を褒め、額田王を妻とする天智天皇をも満足させる歌を詠んだと評価すべきなのである。大人の、しかも情況を巧みに切り抜けた歌といつてよい。

こうした贈答を成り立たせたのは才媛額田王であり、大海人皇子は巧みに答えながらも、真実、こうした女性に育つてゐるのを慕わしく思つてゐたのではないかと思わせる。